

**Sanskrit Manuscript of *the Catuḥstotravivarāṇa* and
Other Works Preserved in the Micro-film Collection of CTTC**

⟨in Japanese⟩

Xuezhu Li

Researcher, China Tibetology Research Center

Abstract

The micro-film collection of Sanskrit manuscript preserved in CTRC consists of 185 boxes which contain more than 700 texts, and utilizing these precious materials, many crucial Buddhist works have been published as fruits of joint projects collaborating with foreign institutes. Recently I have researched box no. 129, which is a copy of palm-leaf manuscript preserved Potala palace consisting of 389 folios (according to Luo Zhao's catalogue). In this box, there is a hitherto unknown commentary on Nāgārjuna's *Catuhstava*, entitled *Catuhstotravivarāṇa*. Unfortunately, its author's name is undiscrined anywhere in the manuscript. But, it is no doubt that this extensive commentary consisting 47 foilos will shed a new light on the study of *Catuhstava*.

要 旨

北京にある CTRC では、多くのサンスクリット写本影印本を保存している。近年、これらの貴重な資料を利用して、外国の研究機関と共同研究で多くの重要な梵語仏典が出版された。本論は、その中第 129 ボックスを調査した情報を報告するものである。このボックスは 389 枚分の貝葉写本からなり、十数種類の論書が収められ、これまで知られていなかった *Catuhstava* の注釈書である *Catuhstotravivarāṇa* と正体不明の極めて重要な唯識論書を含んでいる。

CTRC 所蔵 *Catuhstotravivarāṇa* とその他の梵文写本について

李 学竹

キーワード：梵文写本、四讚頌注、唯識論典

一、はじめに

周知のように、北京にある中国蔵学研究中心 (CTRC) では、ラサのポタラ宮とノ布林カが所蔵している貝葉写本の影印本を預かっている。全部で 185 ボックスあり、700 点の作品を含まれる。2004 年から、オーストリアアカデミーアジア文化思想史研究所との共同研究のもとで、Jinedrabuddhi の『集量論注』、世親の『五蘊論』などの写本校定作業を行い、いくつかのテキストが出版された。それ以来、「チベット自治区梵文テキスト系列叢書」(西藏自治区梵文文本系列叢書、STTAR) というシリーズで、16 巻 23 冊の作品が出版された。最近、CTRC 所蔵の整理番号 129 というカードボックスの写本を再調査したため、その情報を報告したい。このボックスの写本原本はポタラ宮に保存されている。1983 年から 1984 にかけてポタラ宮の写本を調べた羅焯氏の調査ノート^①によると、このボックスには、389 枚分の貝葉写本が収められ、十数種類の論書が収納される。その内容は文法書、唯識論、論理学、讚歌、タントラなどに渡り、かなり多様なものが含まれている。今回、その中に 2 点の写本のみを取り上げて紹介する。

二、唯識論書の写本

まず、このボックスの最初には正体不明の唯識論書と思われる写本がある。当写本は都合 66 枚の貝葉からなる不完全本である。羅焯氏の報告書によると、各葉の寸法は一致せず、横に最も長いものは 32.5 センチ、縦に 5.8 センチと記されている。

写本の真ん中には紐穴が 1 つあり、1 行は約 82 字詰、貝葉片面 7-10 行詰、ベンガル書体で綴られる。1 葉の表裏には平均約 1000-1300 字が含まれる。毎葉の裏面の右端に葉番号が付され、最後葉の番号は 68 と記されているが、写本の終わりではない。また途中にも第 33 と 34 葉が欠けている。最後のコロフォンがえられないため、題名や作

^① この調査ノートは普通『羅焯目録』と称され、未出版のものである。この目録はノ布林カ宮所蔵写本を記載する『羅布林カ所蔵貝葉經目録』及びポタラ宮蔵本を記載する『布達拉宮所蔵貝葉經目録』からなる。目録作成の経緯については、2008 年北京大學で開催された研究集会において羅焯氏自身が、「梵文貝葉經的編目情況及二十餘年的曲折經歷」と題して報告している。この報告の日本語訳が、『仏教学セミナー』第 88 号に公表された。

者の名などを知ることはできない。

冒頭葉(第1葉表)の真ん中には、次のようなチベット語がウメ書体で記されている。

“Je rnam par rig byed tsaṃ du sgrub pa yang dag pa'i don le'u gsum pa |”と、そのすぐ右に一行の梵語があり、“varaṃ hi dhārmakīrtteś carvviṭeṣv api carvvaṇa || bhāvāna”と書かれている。ダンダの前の部分は、Hetubinduṭikā 第二偈の ab 句であり、羅炤氏は恐らくこの二つの記述を根拠に、この写本を「唯識——量理についての著作」であると判断したのだろう。冒頭に namo buddhāya で始まり、それから帰敬偈を書かれている。その直後に

iha yuktyāgamabahiṣkṛtacetasāṃ svayūthyānāṃ parayūthyānāṃ ca
vijñā<pti>mātrapratikṣe[p]ājñānavinodana hetor idam ārabhyate ||

ここにおいて、論理と聖教から逸脱した心を持つ、自派に属する者たち(仏教徒)と、他派に属する者たち(異教徒)の、唯識[説]に反対するという無知を取り除くために、この[書]を始める。

とあり、著作意図は唯識説を弁護するためであると表明している。また、本文の中に「ālayavijñāna、vijñaptimātra、nirākāravādidarśana、prakāśaなどの言葉がよく出てくるので、唯識系に属する書物であることは間違いないであろう。特に「無形象知識論(nirākāravādidarśana)」や、「プラカーシャ(prakāśa)」という議論は、ラトナーカラシャーントンティにきわめて特徴的な用語である。したがって、ラトナーカラシャーントンティもしくは、その系列にある論師の著作である可能性が高いと思われる。いずれにしても、1葉は平均1200字もあり、68枚以上もあるので、かなり大型なテキストであり、唯識思想の研究に価値のあるテキストであると確信される。詳細な研究は今後を期するが、参考のため、第68葉裏面だけの翻刻を次ぎに示す。

(68v1) hasa[mbha]ve nirākṛte vijñānavādas sidhyati | jñānasya tu na tadrūpatvaṃ
virudhyate | yathopapatti(r) vidyamānaparamārthasyaiva tadrūpasādrśyāt⁰ | tenaitat
samvṛtisadrūpam ucyate (l) [u]papadyamānatve pi para[rū]patvena satva

(68v2) syāvaśyābhyupagantavyatvāt⁰ | tad evaṃ nīlaprakāśatā nīla^(l)kāratātmikā
sidhyatīti pratikarmavyavasthāpane vyavasthāpakānāṃ tad eva sādhanam yuktaṃ (l)
pratipa[ttsu] nīlaprakāśarūpaṃ jñānam na sādhanāpekṣam svahetuta eva

(68v3) nīlākārarūpasya nīlaprakāśasyotpa[tre] raktodakavad iti pra•tipāditaṃ | api ca ||
|| na viśeṣaḥ sahabhuvas sa jñāne rthanimittaḥ | tataś ca bhinnakālatvān nānākāre
rthavedanaṃ || viśeṣa

(68v4) s tāvat prakāśamānatvam aprakāśamānavasthā prativiśiṣṭatvam
ni•rākāravādidarśane ca samānakālatā vyartha jñānena prakāśyate | tasmāt
sahabhuvabodhijñānasyeti nāsau jñānenāhitā

(68v5) tiśayaḥ kriyate sahabhuvo tiśayānutpatti | atha bhinnakālam vijñā•nam atīśayam

āvartte | tat saṃpradhāryam etat⁰ | ubhayathā hy atīśayas saṃbhāvyeta jñānena vā asya
prakāśamānatābhinirvarttanāt⁰ | jñā

(68v6) naṃ vārthenātmaprakāśarūpaṃ nirvartyate | tatrārthasya viśeṣodaye
jñā●navi[arthya]manandha(?)saṃvedyatvaṃ ceti jñānasyaiva viśeṣye rthanimittaja
upapannaḥ | utataś ca nānakāre jñāne rthavedanaṃ tatkaśmāt⁰

(68v7) bhinnakālatvāt⁰ | yadā hi jñānaṃ na tadārthaḥ kāryakāle
kāraṇasyakṣaṇakṣayitayām(?) anuvṛtteḥ | tad anākāreṇa jñānena prakāśakenāpi kiṃ
prakāśyet⁰ | prakāśyābhāvāt⁰ | kāraṇasyaiva ta(†) prakāśyatam i|

(68v8) ti nānyatra tadbhāvaḥ | tataś cā«syā»pi prakāśo na ca kiñcit prakāśata iti
bodhanātra saṃvedanaṃ | yadā tv artha ātmākāropacālenātmanaḥ prakāśakaṃ prakāśam
abhinir{bhir}varttayati tadā vidyamāne prakāśe

- ※ ⁰ = absence of virama ; (†) = sic ;
● = string hole ; * = virāma ;
| = daṇḍa ; || = double daṇḍa ;
() = Akṣara(s) restored by the present editor ;
[] = unclear/damaged akṣara(s) in the manuscript ;
« » = Akṣara(s) inserted by the scribe in the manuscript ;
‡ = gap filling sign before a string hole or end of a line.

三、*Catuḥstotra* と *Catuḥstotravivarāṇa* 写本

Catuḥstotra とその注釈 *Catuḥstotravivarāṇa* 写本は同ボックスの真ん中にあり、羅炤氏の報告は次のように記述している。

《四頌讚》 (*Catuḥstotra*) 與《四頌讚廣注》 (*Catuḥstotravivarāṇa*) 合集一處，內夾紙條上寫：“編號 33，張數 54，霞魯”，全部貝葉以線繩貫穿。上面的是《四頌讚廣注》，共 47 葉，完整。貝葉長 31.9 釐米，寬 5 釐米，每面墨書斜體梵文 5 行，字體介於“達利迦”與“笈多”體之間。下面的 7 葉為《四頌讚》，不完整，每面墨書斜體梵文 6 行，字體介於“達利迦”與“笈多”體之間。以上《四頌讚》與《四頌讚廣注》為同一人書寫。

この記述から分かることは、同じ字体で書かれたこの写本は、全部で 54 葉あり、*Catuḥstotravivarāṇa* は 47 枚の貝葉からなる完本であり、*Catuḥstotra* は 7 枚しかなく不完全本である。また、写本のなかに、紙切れが挟まれて、“編號 33，張數 54，霞魯”と書いてあるので、この写本は恐らく 1960 年代にシャル寺から集めてきたことを示している。

今回調べたところ、*Catuḥstotra* と *Catuḥstotravivarāṇa* の場所は逆になって 7 枚の *Catuḥstotra* は *Catuḥstotravivarāṇa* の前に置かれている。写本の真ん中には紐穴が 1 つあ

り、ベンガルの書体でやや斜めに書かれている。毎葉の裏面の右端に葉番号が付される。

Catuḥstotra の写本は片面に 6 行詰、1 行は約 55 字で綴られる。1 葉の表裏には平均約 600–660 字が含まれる。本文に *namo mañjunāthāya* で始まり、それから 1b1-3a1 は *lokātīstava* で、3a1-4a5 は *niraupamyastava* で、4a5-7b1 は *acīntyastava* である。7b2-7b6 は第 4 讃歌の *paramārthastava* であると思われ、内容としては第 8 頌の *asthitaḥ sarvvadha* までに終わり、Tucci の校訂本と比較して 3 偈ほど欠けている。恐らくあと 1 葉ほどが元々存在したと予想される。そのため、第 4 讃歌の題名と写本のコロフォンを得られることができなかった。

Catuḥstotravivarāṇa 写本は、貝葉片面 5 行詰、1 行は約 55 字で綴られる。1 葉の表裏には平均約 500–550 字が含まれ、47 枚もあるので、全部で 20000–25000 字ほどであろう。1b1–b5 は 2 つ帰敬偈を含む序文であり、*namo ratnatrayāya* (三宝に帰依) で始まり、次に二偈の帰敬頌を述べ、

lokāṣṭadharmmatā<ti>taṃ lokātītaṃ praṇamya taṃ
stutivṛttim karomy āryasammatāṃ śāstrasammatāṃ || (1)

svābhāvikaḥ sa kāritras trikāyālāpato muniḥ |
na te tena vinā yasmāt tena syād āditastutiḥ || (2)

世間八法を超えた、かの超世間者(なる仏)に礼拝してから、聖者たちに容認され、諸論書にも随順した讃歌注を、私は著作しよう。

三身を語ることにもついで、作用をそなえた自性なる牟尼(自性身)が[語られる]。それら(三身)は、彼(自性身)無しにはありえない。なぜなら彼によって最初の讃歌があるべきだからである。

第 1 偈はこの讃歌の注釈を著作する目的を明かし、そして仏の三身を述べている。その直後の長行は仏の三身説に関して解釈している。序文の末尾には、サータヴァーハナ王(*sātavāhanabhūhujāḥ*) のために[龍樹]阿闍梨様により四讃歌が(*catuḥstutiḥ*) 著作された(*kr̥tā*) という旨が記されている。続きに *lokātīstavaṃ* の第 1 偈の解釈が始まる。この写本の末尾においては、コロフォンを得ることができた。その翻刻は次の通りである。

(47a5) ye dharmmā hetuprabhavā hetun teṣā(m) tathāgeto(ḥ) hy
a(47b1)vadat teṣāṃ ca yo nirodha evamvādī mahāśravaṇa(h) || ||

如来はそれら諸法は因より生ずるのであると説かれた。

実に、その因の滅について、大沙門がそのようにお説きになった。

samvat*38 nayapāle kolipattanāvasthite ṭiḍoguhāyāṃ bhoṭādeśīyaloca-

(47b2) vāpaṇḍitabhikṣuśrīvajradhvajasya saugatāvadhūtaśrībāla•bodhena likhitapustakaṃ |

eṣṭhakṛṣṇapratipādaḥ somavāsare | mahārājādhirā

(47b3) jarayuvatsodbhavaśrījayabhīmadevasya rājyo⁽¹⁾ śubham astu •

sarvvajagataparahitaniratā bhavantu bhūtagaṇāḥ lokāprayā | tu śāntīm sarvvatra (47b4)

mukhībhavatu lokāḥ ||

ナヤパーラ王の治世 38 年目、kolipattana の近く、ṭida の庵にて、チベットの翻訳師であり学者比丘の吉祥ヴァジュラドバジャ (vajradhvaja) の所有する、仏教徒でありアヴァドゥータ (avadhūta) である吉祥バーラボーダによって記された書物である。黒月の最初の月曜日に、rayuvatsa 所生のシュリージャヤビーマデーヴァ (śrījayabhīmadeva) 大王の御代において幸あれ、一切世界の利益があれかし。

このコロフォンは法身偈から始まり、その後に書写の年代、場所及び所有者を明記している。紐穴の周りに蓮華と蕾を描いて最後に siddham というシンボルを書いている。しかしながら、肝心な著者の名が記されていない。

ともかくも、*Catuḥstotra* は Tucci と Lindtner の校訂本があり、それらの底本の写本とは別に、さらにいくつの写本も存在することは CTRC のサンダ氏の写本目録に確認できる。しかし、*Catuḥstotra* に対する注釈書は今まで知る限り、他に 2 点知られているものの、*Catuḥstotravivarāṇa* は蔵訳も漢訳もなく、*Catuḥstotra* の研究に貴重な資料であることは言うまでもない。

参考文献

Tucci, Giuseppe

1932 “Two hymns of the *Catuḥstava* of Nāgārjuna,” *The Journal of the Royal Asiatic Society*, pp.309-325.

1956 “*Catuḥstavasamāsārtha* of Amṛtākara,” in *Minor Buddhist Texts I*, Roma, pp.234-246.

Lindtner, Christian

1982. *Nagarjuniana: Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*, 121-161 Akademisk Forlag, Copenhagen.

酒井真典

1959 「龍樹に帰せられる讃歌—特に四讃について—」『日本仏教学会年報』24, pp.1-44。

津田明雅

2002 「*Catuḥstava* テキストの再検討—注釈書を利用して—」『仏教史学研究』44-2, pp.1-26 (横)。

